テルカ・リュミレースへ飛ばされた少年

SYUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テルカ・リュミレースへ飛ばされた少年

【Ｎコード】
Ｎ１８５１Ｚ

【作者名】
ＳＹＵＮ

【あらすじ】
突然、地球日本からテルカ・リュミレースという世界へ飛ばされてしまった天原ハヤト。放浪の末、魔物に襲われるが、ゼルス（神）に助けられて身体を強化してくれた上にミーティアというチートな馬車を貰った。そしてハヤトは自分のギルド“天馬の翼”を立ち上げ、旅が始まった・・・　※この作品は個性的で作者は未熟です。遅くても１ヶ月で更新するつもりですので、宜しくお願いします。

オリジナルの紹介

ーーーーーーーーーーーギルドの紹介ーーーーーーーーーーーー

☆天馬の翼（ペガサスウィン）

ハヤトが立ち上げた何でも屋のギルドである。メンバーはハヤトとペガで２名だけの小さいギルドで知名度は高くない。

ーーーーーーーーーーーキャラクターの紹介ーーーーーーーーーーーー

☆ハヤト・アマノハラ（天原ハヤト）※主人公

性別／年齢／身長：男性／１８歳／１７０ｃｍ（原作開始の時点）

外見：“ＴＯＩ”のルカ・ミルダにそっくりだが、日本人なので髪の色は黒。

服装：黄色と水色のラインが入った白いジャケットに黒い長ズボンに皮の靴。

性格：優しく、真面目なのだが、騙されやすい。

身体能力：全て、人間の中で一番優れている（魔物・始祖の隷長を含まない）

武器：片手剣

技：フレン・シーフォの剣技＋αと瞬動が使える。

術：治癒術を全て使える。攻撃魔術はホーリーランスとディバインストリーク。

普通の高校生で、今はテイルズオブヴェスペリアにハマっている。それはまだクリアしていないのに、不幸にもテルカ・リュミレースへ飛ばされてしまう。魔物に襲われるが、ゼルスに助けられる。

☆ペガ　※サブ

ミーティアを管理するＡＩでハヤトの旅をサポートしてくれる存在。

☆ペガ（馬）　※サブ
ペガが操る白馬ロボットでミーティアを牽引する。天馬に変形して飛行が可能になる。

☆ゼルス　※サブ
神の始祖で神族を統べる王。外見は「天地無用」の津名魅にそっくりの青年で身長が１８０？もある。女性にみえるが性別は男でも女でもない。ハヤトが居た世元と別でテルカ・リュミレースがある世元の最高責任者で、迷い子のハヤトを助ける。
ＳＹＵＮの第１作「真剣で神の協力者になった二人」のと同一人物です。

――――――――――ミーティアについて――――――――――
<<説明>>
ゼルスがハヤトの為に作ったメタリックシルバー色の６人乗り馬車。外見は観覧車のゴンドラを横に伸ばしたような構造で大きさはワゴン車と同じぐらい。車内の天井に隠し扉があり、その先は圧縮空間で出来た幾つかの部屋がある。
移動要塞ヘラクレスに踏まれても潰れない強度を誇る。

<<隠し部屋>>
☆エントランス
玄関ホールで端に出入口があり、各部屋に繋がる扉が６つある。

☆居間＋寝室×２
ゆっくりくつろぐ部屋と寝室で１セットの個室。それが２室ある。

☆食堂＋厨房
ダイニングキッチン形式。食材製造装置があるので食べ物に困らな

い。

☆洗面所＋パスルーム
パスルームは露天風呂を再現した造りになっている。

☆工房＋管制室
工房に素材製造装置があるのでアイテム作成に困らない。パソコンもあるので様々な作り方をチェック出来る。管制室はペガと直接お話したり、世界の情勢を確認したり出来る。

☆洗濯場＋お手洗
洗濯場にクリーニングマシンがあって早く洗濯・乾燥を済ませる事が出来る。お手洗もあるので、外で用をたす抵抗がある人にとって有難い。

構造は以下の通り

○寝○厨○寝○
○居○食○居○
□■■■■■■
○面○工○濯○
○パ○管○お○

□＝出入口
■＝エントランス

旅日記1頁目　旅の始まり

＝ユルゾレア大陸　南部＝

ハヤト「・・・・・・」

草原や森が広がり人が1人も居ない場所で、ただ1人立つ少年。天原ハヤトは呆然としていた。

ハヤト（何で僕はこんな所に居るんだろう・・街の中に居た筈なのに・・）

ハヤトは近くに人が居ないか確認する為に周りを見回す。しかし、遠くには山が並び周辺は草原や森だけで建物が1つも無かった。

ハヤト（此処はアフリカかな？　森はあるけど草原も広がっているし）

ハヤトは人が居る場所を探す為に歩き出した。森は余計危ないので入らない。

数時間後・・・

ハヤト「疲れた・・お腹が空いた・・」

ハヤト（こんな事になるんだったら、昼食を多めに食べれば良かった・・）

ハヤトは歩くのを止めて座り休憩をする。

ハヤト（歩いても歩いても、人の住んでいる場所ところか、道が見つからない）

ハヤト「うぅ・・」

ハヤト（どうして僕はこんな目に・・悪い事でもしたのかな？　身に覚えは無いけど・・）

ガサガサ・・

大きく生い茂った草むらが揺れる。

ハヤト「！？」

ハヤト（ま、まさか・・ライオン？　もし、アフリカなら有り得るかも・・）

ハヤトは警戒して、揺れる草むらを見ながら後退する。

パサッ！

草むらの中から3匹の大きいカマキリ（魔物）が飛び出した。

ハヤト「なっ！？　か、カマキリの化け物っ！？」

ハヤトは予想もしていなかったので、叫びながら驚愕する。

魔物「ギ・・ギギ」

魔物は鎌を鳴らしながらハヤトに近寄る。

ハヤト（逃げないと、喰われる）

身の危険を感じたので、ハヤトは逃走した。それを追いかける為に魔物も走り出す。

十数分後・・・

ハヤト「はあ・・はあ・・」

ハヤト（体力が・・もうだめ・・）

ハヤトは諦めかけていた。その時・・・

ゴオォーーーーッ!!

突然、ハヤトを囲む竜巻が発生して魔物は全て吹き飛んでいった。

ハヤト「え!?」

ハヤトは驚きながら、遠くへ飛ばされて行く魔物達を見送っていた。

ゼルス「少年。怪我はありませんか?」

水色長髪の女性?はハヤトに声をかけた。彼女?は神々を統べる王のゼルスである。

ハヤト「え、あ、大丈夫です。お姉さん貴女は誰ですか?」

ゼルス「私はゼルス。貴方を助けに来ました」

ハヤト「どうも・・僕は天原ハヤトといいます。助けに来たってどういう事ですか？」

ゼルス「貴方は異世元漂流者だからですよ。私はその者を助ける義務があります」

ハヤト「異世元漂流者？」

ゼルス「簡単に言いますと、平行世界から此処へ飛ばされた迷子の事です。その確率は宝くじよりかなりかなり低いのですが、運がありませんでしたね」

ハヤト「な、何だってーーーーーぇえええっ！？」

ハヤトは大声を上げて叫ぶ。ゼルスは両手で自分の耳を塞いだ。

暫くして・・・

ゼルス「落ち着きましたか？」

ハヤト「はい・・すみません。僕は元の世界へ帰れるのでしょうか？」

ゼルス「・・・・・・」

言いにくいのか、ゼルスは難しい顔になる。

ゼルス「・・申し上げにくいのですが、帰るのは不可能です。理由

は、違う世元・・平行世界は無数に存在して貴方が居た世元を指す座標は不明だからです」

ハヤト「そ、そんな・・」

ハヤトは絶望に包まれ、力なくへたり込んで頭を下げた。

ゼルス「ハヤト・・・」

ハヤト「・・・僕は此処で生きていく自信がありません」

ゼルス「その心配は無用。貴方がテルカ・リュミレースで不自由の無い生活を送れるように支援します。それが“当世元の最高神”としての義務なのだから」

ハヤト「え!?」

ハヤトは驚く。ゼルスは神が此処に居るからだと思っているが、其処ではない。

ハヤト「テルカ・リュミレースって・・帝国の首都ザーフィアスやギルドが集まる街ダングレストとか在りますよね？　他に花の街ハルルとか」

ゼルス「ええ、全て在りますよ。知っている所を見ると、貴方が居た世元では地球とテルカ・リュミレースの交流は有るようですね」

ハヤト「いや、交流は無いです」

ゼルス「？　どういう事ですか？」

ハヤト「テレビゲーム“テイルズオブヴェスペリア”の世界なんです。一応確認したい所があるんだけど、ユーリ・ローウェルやエステリーゼ・シデス・ヒュラッセインという人物はいますか？」

ゼルス「成る程。その2人は帝都ザーフィアスで暮らしています」

ゼルス（テレビゲームか・・違う世元なら有り得るな）

ハヤト「ユーリは騎士団で働いていますか？」

ゼルス「2年前・・彼は18歳で辞めています。今は下町で生活していますよ」

ハヤト「そうですか・・」

ハヤト（物語が始まる1年前か・・その通りに進むかは怪しいけど）

ゼルス「さて、貴方がテルカ・リュミレースで生きていく為の処置を済ませましょうか」

ハヤト「処置？」

ゼルス「ええ、まずは・・」

ゼルスは手の平をハヤトに向ける。そして一瞬、光がハヤトを包み込んだ。

ハヤト「っ！？　今のは？」

ゼルス「身の危険を減らす為に身体能力を強化しておきました。左手首を見て下さい」

ゼルスに言われ、ハヤトは左手首を確認する。自分の左手首に水色の宝石が付いた腕輪をはめられていた。

ハヤト「この腕輪はもしかして、武醒魔導器ですよね？」

ゼルス「その通りです。全ての術技を記憶してありますが資質上、貴方は剣の技と光の魔術を含む治癒術の２つしか使えませんので覚えておいて下さい。あと、今の貴方は術技に頼る剣の素人同様なので強敵との無理な戦闘はしないように」

ハヤト「はい」

ゼルス「魔核の代わりにゼルスフィアを使った私の特別製で魔導器が術式を処理しますので無詠唱で術を発動出来ます」

ハヤト「とても便利ですね。ゼルスフィアって何ですか？」

ゼルス「ゼルスフィアは無からエネルギーを生み出す宝石で、私しか精製出来ません」

ハヤト「ええっ！　大丈夫なの？　下手したら世界が吹き飛びそうなんだけど・・もし、盗られたら・・」

ゼルス「私だけ出力の制限と使用者を指定出来ますので心配要りません」

ハヤト「ほっ。良かった・・最大出力はどれ位ですか？」

ゼルス「貴方が使える最強の術“ディバインストリーク”を全力で使えば、山に直径１２メートルの深い大穴が出来ます。貴方なら使い方を誤る心配は無いでしょう」

ハヤト「ははは・・ソウデスカ・・」

ハヤト（初対面なのに信用されているんだな・・扱いに気を付けよう）

ハヤトは苦笑しながらも、力を正しく使うと誓ったのだった。

ゼルス「次は衣食住を用意します。街の住人か、旅の人か、選んで下さい」

ハヤト「旅の人でお願いします。折角、本物のテルカ・リュミレースに来たんだから色んな所を回ってみたい」

ゼルス「分かりました」

ゼルスは了承して振り返り、ハヤトに背を向けた。

ゼルス「出でよ！　ペガとミーティア！」

ゼルスは唱えると前方の空間に穴が開いて、其処から白馬と馬車が出現した。

馬ペガ「ヒヒーン」

ハヤト「す、凄い・・・だけど、何で馬車なんですか？」

ゼルス「テルカ・リュミレースでの移動手段は馬車が主流ですから、それに従っただけです」

ハヤト「た、確かに・・・テイルズオブヴェスペリアをプレイしていた時、自動車や飛行機を１つも見かけなかったし」

ゼルス「その馬車はミーティアと呼び、上部に圧縮空間を利用して造った貴方の家がありますので大切に使って下さいね」

ハヤト「え、あ・・はい！」

ハヤト（圧縮空間は架空の技術なんだけど、神様は凄いなぁ・・）

ゼルス【ペガ。私は帰りますので、ハヤトの面倒を見てあげて下さい】

ゼルスはペガに念話を飛ばす。

ペガ【了解しました。創造主】

ペガも念話で返し、返事をした。

ペガ【初めまして。私はミーティアのＡＩペガです】

ハヤト「っ！？　今のは・・頭の中に言葉が入ってくる・・」

ゼルス「ペガが貴方に念話をかけていますよ。ペガに伝えたい言葉の念を込めてみて下さい」

ハヤト「はい。やってみます」

ハヤト【初めまして。僕は天原ハヤトといいます】

ハヤトは頑張ってペガに念話を飛ばした。

ペガ【楽しい旅になるようにサポートしますね。宜しくお願いします】

ハヤト【こちらこそ、宜しくお願いします】

ゼルス「ハヤト。私は天界へ帰りますが、何か要望あれば言って下さい」

ハヤト「あ、此処はテルカ・リュミレースのどの辺りですか？」

ゼルス「此処は、記録されている世界地図で左上に位置するユルゾレア大陸の南部です。北部に温泉がある町しか人は住んでいません」

ハヤト「温泉かぁ・・行ってみたいな」

ゼルス「ペガに頼めば、行けますよ。ただ・・」

ハヤト「？」

ゼルス「料金が1人につき5万ガルドかかります」

ハヤト「高っ！　そんなにするの？」

ゼルス「貴族の方々が利用しているので高額になっています。温泉

に入りたいなら5万ガルド用意しますが・・どうですか？」

ハヤト「いえ、遠慮します。自分でギルドを設立してお金を貯めようかと思っていますから」

ゼルス「ふふっ、分かりました。困った事があれば、ペガを通して私に連絡して下さい。忙しい身ですので、返事が遅れるかも知れませんが・・」

ハヤト「はい！　ありがとうございます」

ゼルス「では、さようなら。貴方に良い旅を」

ゼルスはハヤトに挨拶した後、転移術で天界へ帰っていった。

ペガ【ハヤト。行き先の指定をお願いします】

ハヤト【ギルドはどんな感じなのか見たいからダングレストまでお願いします】

ペガ【陸が繋がっていませんので飛んで行きますが、宜しいですか？】

ハヤト【構いません・・・って、空を飛べるの？】

ペガ【はい。とりあえず、ミーティアの中に入って下さい】

ミーティアのドアはタクシーのように自動で開く。

ハヤト【ドアも動かせるんですね】

ハヤト（車内はワゴン車の中と似ているけど、運転席が無いから広いなぁ・・）

ハヤトはミーティアに搭乗する。その後、ドアが自動で閉まる。

ペガ【通常モードから飛行モードに切り替えます！】

ミーティアの前方に立つ馬ペガは翼を出し広げて天馬になった。

ハヤト（す、凄い。何という神秘的な・・）

ペガ【驚いていますね。ハヤト】

ハヤト【うん・・あ、そうだ！　僕のギルド名は“天馬の翼”と名付けよう】

ペガ【そのままだという気がしますが、良いギルド名ですね】

ハヤト【何だか、ワクワクしてきたな～。ペガ、出発よろしく】

ペガ【はい。では・・・発進します】

天馬ペガはミーティアを引き、助走をつけて大空へ飛び上がる。１８０度旋回し、ダングレストを目指して北東へ進んだ。

旅日記1頁目　旅の始まり（後書き）

ハヤトの旅が始まりました。

別の作品「真剣で神の協力者になった二人」と並行して物語を書いていきます。

更新は遅くなりますが、1ヶ月以内で更新しますので宜しくお願いします。

ではまた！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1851z/

テルカ・リュミレースへ飛ばされた少年

2011年12月11日10時50分発行